
星屑の戦艦

久保 徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑の戦艦

【Nコード】

N2947A

【作者名】

久保 徹

【あらすじ】

連合共通暦六五六年。星系連合軍に所属する二人の若者が、幸か不幸か史上約二 年ぶりの実戦機会に遭遇する

01 敗北の味

彼女はいささか緊張していた

それもそのはず。彼女（正確には彼女達）はこれから戦闘を始めようとしているのだ

目を覆うように被った映像環には外部カメラからの映像、船体に多数設置された各種センサーからの情報が映し出されている

しかし彼女はセンサーからの情報には目もくれず、カメラが映し出す宇宙の景色の一点に集中している

漆黒の中に輝く星々の中に明らかに異質な物体がある

その少し斜め上に赤字で サルヴァーシユ と表示されている。赤字は敵勢力を示す色だ

その時、映像環の中に通信窓が現れた。女性が映っている

「ララ十揮長、用意はいいかしら？」

「いつでもどうぞ。ソリス戦隊長」

平静を装った声とは裏腹に、操縦桿を握る手には力が入っている

「よろしい、では始めましょう」

ソリスがそう言うと通信窓は消えた。すると今度はすぐ近くで男性の声がした

「敵艦、機関始動」

主任偵察士のアトリアスが淡々と告げる

「こちらも機関始動」

「了解。機関始動」

ララの命令を復唱し、主任技術士のクロムが機関始動を確認する

艦は滑らかに動き出した。とは言っても速度計の数値はあつという間に上がっていく

しかし艦橋にいるララ達は、重力制御のお陰で大した振動は感じない。みるみるうちにサルヴァーシュとの距離が詰まっていく

「まもなく射程距離とアトリアス」

「全砲門攻撃用意」

主任砲術士のイリアムがパネルに指を奔らせる。全砲門と言っても可動式ビーム砲が4門と主砲の反陽子砲が1門あるのみ

さらに反陽子砲の制御は艦長であるララの仕事なので、イリアムはすぐに

「攻撃用意完了」

と報告する

「イリアム、射程内に入りしだい指示を待たずに撃て」

「了解」

ほどなくして《サルヴァーシユ》を射程距離に捉えた。イリアムは指示通り四門のビーム砲を発射

《サルヴァーシユ》は姿勢制御機関を噴かし艦を横滑りさせ回避した

両艦は高速ですれ違いながらもビーム砲で攻撃し続けていた

その内の一つがララ達の機動戦闘艦レイフロースの船体をかすめた

「やられたか!？」

「右舷装甲小破。問題ありません」

アトリアスの報告を聞いてララは艦を傷つけてしまったことを悔やんだ

ララはすぐさま艦を反転させた

だが《サルヴァーシユ》の方が一足早く反転を終えていた

「敵主砲、本艦に照準」

乗っている艦が主砲に狙われているにも関わらず、アトリアスは相変わらず熱がこもらない

「くっ！」

間に合うか……！

《レイフロース》が発射態勢に入った瞬間、《サルヴァーシユ》からの反陽子砲が襲いかかった
艦全体が激しく揺れる

「被害は！？」

わざわざ聞かなくても報告はされるが、ララは聞かずにはいられなかった

「機関損傷！出力低下！戦時出力を保てません！」

「艦底部副砲大破！」

「外部センサー機能停止。船体各所で誘爆発生」

三人からそれぞれ報告が上がった

ララが次を考えていたとき、警報と共に艦橋の照明が数秒間赤になった

「本艦は爆散しました。本艦は爆散しました」

冷たい機械音が艦橋に響いた

照明が元に戻るとララの映像環に通信窓が現われた

「お疲れさま、ララ十輝長」

ソリス百輝長だ。ララは映像環を外す

艦長席に取り付けられた端末の画面に目をやる

「初めてにしては上出来よ」

「どうも」

口ではそう言っているも顔はそうはいかない

模擬戦闘とはいえ、撃破されて嬉しいわけがない

「これで訓練航行は終わり。正式な配属は後日連絡するわ、それじゃ」

明らかに不満そうなララの表情を見て、早々に通信を切った

少しの沈黙の後、ララは

「あと頼む」

と言って艦長席から立ち上がった

艦橋から出ようとしたとき計務士のカイルが入ってきた

「あ、艦長。お疲れさまです」

ララは笑顔のカイルを横目で見ると何も言わずに歩いていった
まった

「えーつと……」

カイルは困ったように頭を掻きながらララの後ろ姿を見送る
すると肩にポンと手を置かれ振り向いた

「なあ、カイル主任計務士」

クロムだった

「はい？」

「我らが艦長は今の敗北で、その自信とプライドを見事に砕かれてしまった。わかるか？」

「はあ」

とカイルは気のない返事をする

クロムはカイルの肩に手を回し、艦長席の右後方にある計務士用の椅子に座らせた

「正式配属が決まろうとしている今、艦長がアレではマズイんだ」

「艦長の能力を疑ってるんですか？」

カイルは少し驚いたように言った

「そんなことはない。要するにだな……」

「士気に関わる」

二人の会話にアトリアスが割って入った。クロムは力強くうなづく。「艦長が落ち込んでる間にどこぞと戦争でも起きてみる。おれ達はただの動物的だ」

とは言っても彼女達《星系連合》が最後に実戦を行なったのは、今から二、四年前の連合共通暦四五二年のこと

ある星系が反乱を起こそうとした際、星系を取り囲むように圧倒的な大艦隊で制圧し、上空からの精密攻撃で反乱軍施設を破壊し尽くした

よってララ達はおろか現在の連合軍兵士は、誰一人実戦経験はない「わかりましたよ」

カイルはやれやれといった様子で立ち上がった

はたしてうまくいくかなあ？

カイルはなかなか難しい任務だ、と思った

02 二人の若者

ララは艦長室に入ると椅子に座り深く息を吐きながら机に突っ伏した

先程の模擬戦闘で訓練航行は終わり、配属が決まれば晴れて正式な艦長として指揮することになる

その事自体は彼女も嬉しかったが、最後の模擬戦闘は勝って終わりたかった

だが戦隊長であるソリス百揮長は、ララを勝たせる気など初めから無い。実はソリス自身が サルヴァーシユ を操っていたのだ

訓練航行の最終模擬戦闘の相手役を戦隊長が務めるのは一般的なことだが、訓練生達にはそのことは知らされない

ララは敗北を経験するという通過儀礼を終えた

その時艦長室の室外通信機が鳴った。卓上端末を見るとカイルの顔が映っている。ララは体を起こすと端末を操作して扉を開けた

「艦長、お疲れ様です」

カイルが部屋の中へ進むと、扉は勝手に閉まった

「先程の模擬戦闘の事です……」

「カイル」

カイルの話を遮ってララは

「二人しかいないんだから、いつも通りでいいよ」

「ああ、そっか」

それを聞いてカイルは思い出したように言った

「言つとくけど、私は落ち込んでなんかいない」

「おいおい、僕の仕事がなくなるよ」

カイルは苦笑いして言う。ララはそんなカイルの顔をじーっと見ながら何か言いたそうだ

「あの三人に言われたの？」

「まあね」

カイルは隠さず答えた

「みんなもそれほど心配してないよ」

「そうかな」

ララが卓上端末に目をやると二人ともしばらく黙っていた

「カイル……」

「ララが口を開いた」

「なに？」

「黙って突っ立っていられると落ち着かないんだけど」

「なるほど」

「カイルはうなずきベッドに座った」

「相手の艦長は誰だったんだろう」

「そつだねえ」

「ララは模擬戦闘での《サルヴァーシユ》の艦長のことを考えた」

「艦の性能が同じなら勝負を決めるのは艦長次第というわけだ」

「実はソリス戦隊長だったりして」

「まさか」

「そつ言つたら自身も最初は同じことを考えていた」

「もしそつなら始めから万が一にも勝ち目はない」

「まあ考えてもしかたないよ」

「うん、そつね」

「じゃあ僕はもう行くよ」

カイルは立ち上がって出ていこうとした

「カイル」

扉の前で呼び止められてカイルは振り向いた

「ん？」

「心配させてごめん」

「いいよ、気にしないで」

カイルは笑顔で退室した

「しっかりしないと」

椅子の背もたれに体を預け、静かにつぶやいた

星系連合軍が艦隊を展開している宙域は、超空間航路を使っても端から端まで行くのに半年以上かかるほど広大になっている

彼はその広大な範囲の一番端にいた

彼の仲間達も星系連合領域を囲むように配置されている

そして彼は今ちょっとした異常事態に陥っていた

輝く星たちの海の中にいるはずの彼だが、彼の視界の中央に星の輝きは見られない

そこにあつた星たちが一斉に消えたとも考えられない

彼は持てる力の全てを使って原因を調べ始めた

原因はすぐに判明した

星が消えたのではなく星と彼との間に何か割り込んでいるのだ

何かの正体を調べている間にもその影はみるみる巨大になり、ついに彼の視界は影で埋め尽くされた

調査した結果を仲間に戻けた後、凄まじい衝撃とともに彼はこの宇宙から消えた

03 第一 六二戦隊

星系連合軍第一艦隊旗艦、戦滅艦キアルイクの艦長席で艦長のエルフェス提督は、退屈そうな表情で外部カメラの映像を見ている

艦隊を構成する無数の艦が、規則正しく整列している

「提督」

「なんですか？」

横を見ると副艦長のセルスカが立っている

「我が艦隊の巡視艦が監視衛星からの情報を受信しました」

「監視衛星ってどこのです？」

エルフェスは視線を映像に戻しながら聞いた

「マルデイス星系です」

「マルデイス？あんな辺境で何があったんですか？」

マルデイス星系は一つの有人惑星と二つの無人惑星からなる星系

これといった特徴もない平凡な星系だ

「いえ、マルデイスでは何もありません」

「じゃあなんですか？」

エルフェスの視線はまだ映像に向いている

「マルデイス星系に配備されている衛星の内の一基が、数時間前に信号途絶しました」

エルフェスは振り返る

同時に 退屈しないで済むかもしれない とも思った

「攻撃されたんですか？」

「直前まで周囲には一隻の艦も確認されていません」

エルフェスは手をあごに当てながら考え込んだ

「映像を見るかぎり、隕石が衝突したようです」

それを見てセルスカが答えを言った

それを先に言いなさい

そう思ったが胸の中に収めることにした

「衛星の一基ぐらいいたいた問題ではないでしょう」

「確かに。ですが問題は隕石の方です」

「衝突コースに入ったならさっさと撃ち落とせばいいでしょう」

セルス力は首を振る

「そう簡単にはいきません。軌道要塞と遜色ない大きさなんです」

惑星の軌道上に浮かび外敵から地上の人々を守るために建造された軌道要塞は、戦滅艦十隻分の砲撃能力と八千人を収容できる大きさを持つ

「それは……困りましたね」

本当に困っているのか

セルス力は思った。本当に困った人間は笑ったりはしない

「その大きさでは、いくら外から撃っても無駄撃ちですね。そういえばコースはどうなんですか？」

セルス力は携帯端末に目を落とす

「何事もなければ、到達点は《皇星ファムリオール》です」

「やれやれ。よりもよって……」

《皇星ファムリオール》は星系連合軍の総司令部がある、連合領内ほぼ中央の惑星だ

もし隕石が《ファムリオール》に衝突すれば、想像を絶する被害はもちろんのこと、長い間人は住めなくなるだろう

「到達まで余裕がありますよね？」

「ええ、だいぶ」

「では早速一番近い艦隊を派遣して詳しい調査をしましょう。他の艦隊も予想進路周辺に移動です」

「わかりました」

「正式に配属が決まったわ」

艦橋の正面に大きな通信窓が現われ、ソリス百揮長が高戦艦レイフロースの配属先を告げる

「ララ達艦橋要員は真剣な表情を向けている」

「あなた達の配属先は第一艦隊、第一六二戦隊よ」

「第一艦隊ですか？」

「ララは少し驚いた。なぜなら第一艦隊といえば」

「そう。皇太子殿下の直轄よ」

《星系連合皇太子》にして《艦隊総司令官》それがエルフェスの肩書き

彼が直接指揮する第一艦隊が、ララ達の所属になった

「じゃあ今からキツチリ二四時間後、第一艦隊と合流の為に出発す

るわ。準備よろしく」

その時、通信窓から慌ただしい音が聞こえてきた。ソリスも副艦長から何やら報告を受けている

「ララ十揮長、命令変更よ。出発は十二時間後」

「何かあつたんですか？」

通信窓からはまだ慌ただしく声が飛びかっている

「《皇星ファムリオール》に軌道要塞級の隕石が接近中、だそうよ」

「隕石？」

軌道要塞級の隕石をララはすぐに想像できた。同時に最悪の事態によるその被害も

「それで私たちはどうするんですか？」

「今第五艦隊が調査に向かっているから、とにかく早く第一艦隊に合流しましょう」

「わかりました」

「それじゃ」

通信窓が消え、外部カメラの映像に切り替わる

「十二時間後とはだいぶ急ですね」

クロムが言った

「仕方ない。緊急事態だから」

ララは軽くため息をついた。まさかこんなにも早く緊急事態になるとは思いもしなかった

「でも軌道要塞級の隕石なんてどうやって破壊するんですか？戦艦の一斉射撃でも表面を削るくらいしか……」

今度はイリアムが振り向いて言った。アトリアスは無言のまま端末に指を奔らせている

「それを考えるのは司令部の仕事だよ。それに高戦艦の火力じゃできることは限りなく少なそうだしね」

後方の計務士席からのカイルの声にララは腕組みをしてうなずいた

「みんな、準備急いで」

「了解」

ララの指示で一斉に端末に向かい操作し始めた。艦橋は三人の主任が部下達に指示を出す声で、一気に慌ただしさを増した

「配属が決まった途端これか。運があるんだかないんだか」

カイルは周りに聞こえないように小さな声でつぶやいた

04 コンラッド星系へ

「ミラトニア星系超空間門管理局、航路通行許可を求む」

十二時間後、急ピッチで準備を終え本隊と合流する為、超空間門付近に来ていた

「こちら星系連合軍第一艦隊所属、第一 六二戦隊」

「こちらミラトニア星系管理局。通行を許可します、縦陣で進入してください」

局員は淡々と許可を出し、軽く敬礼をして通信を切った

「通行許可とれました」

「ありがとうございます」

第一 六二戦隊長ソリスは部下と局員のやりとりを見ていた

超空間航路を通るには各星系の超空間門管理局に許可を取らなくてはならない

とは言っても特別な事情でも無いかぎり、先程のような簡単な通信で終わる

「超空間門進入まで十分です」

「二列縦陣を」

ソリスの指示が素早く戦隊全艦に通達され、ソリスの乗るカリスト巡視艦レイフロースとララ達の高戦艦を先頭にした二列縦陣の形をとった

「二列縦陣完了、進入まで五分」

「侵入五分前です」

アトリアスが告げる

艦橋前面に映し出された外部カメラの映像にはミラトニア星系が管理する巨大な装置が見える

四角い枠のような建造物がある。超空間門だ

近づくにつれて門は大きくなってくるが、とても戦艦が通れるようなものではない

「超空間門拡大します」

局員の声が艦橋に響く。すると門は四つの角に切り離され、それぞれが光の線で繋がれている

門は最初の何倍もの大きさになり、戦艦六隻が充分通過できる程になった

「間もなく進入します」

この時艦橋から見えるのは、宇宙とは明らかに違う色の空間

広大な星系連合領内の移動に欠かせない超空間航路の入り口が目前にまで迫ってくる

二列縦陣の一六二戦隊六隻は、速度はそのままに進入して行く。星の輝きと宇宙の黒が、あつという間に後ろへ飛び去っていく

「超空間航路に侵入しました。カリスト から通信。進路をコンラッド星系門に設定後、到着まで艦内休暇とする」

ララが艦内放送を流す

「全搭乗員へ通達。我々は無事に超空間航路に入った。目的地はコンラッド星系、到着まで艦内休暇とする。以上」

放送を終えると艦長席の背もたれに体を預ける。今頃他の搭乗員達は仮眠をとったり世間話でもしているのだろうか

だが艦橋にいる五人はそうはいかない。コンラッド星系までは自動操縦なので特にすることは無いが、不測の事態が起こらないとも限らないので交代で番をする

「それでは艦長、失礼します」

「うん。お疲れ様」

非番のアトリアスとイリアムが敬礼して艦橋を出て行った。ララも敬礼を返して見送る

残ったのはララとカイル、そしてクロムの三人だ

「はあ、酒が飲みてえな」

「持ってきてきましようか？クロムさん」

カイルが意地悪そうな笑みを浮かべながら言った

「どうせ置いてないくせに。超空間にも軌道商店街置いてくんないかな」

「どうやって買うんですか？航行中なのに」

「わかってるよ。お前は一技術士のささやかな願いを奪うのがそんなに楽しいか？」

ララは二人のやり取りを静かに見物していた。超空間にも軌道商店街を、というのは彼女も考えたことがあった

戦艦に積まれているのは長期保存が出来る軍用携帯食のみで、薄味で種類の少ないそれはあまり好まれてはいない

「カイル、私も飲み物は欲しいよ」

「わかりました。クロムさんは？お酒はないですけど」

「じゃあ珈琲。温かいので砂糖は四つ分」

「甘党なんですね」

「なんだよ、悪いかよ」

「いえ全然。艦長は林檎茶でいいんですよ」

「うん」

カイルは艦橋を出て行くと五分としない内に注文通りの飲み物を持って帰ってきた。彼自身は紅茶のようだ。カイルから飲み物を受け取ると、それを啜りながら束の間の休暇を過ごした

第一艦隊本隊ではエルフェスの元に第五艦隊から隕石の情報が定期的に送られていた

距離がいくらか離れていて、到着まで数時間かかるため受信した時にはすでに最新の情報ではなくなっているが

「なるほど。軌道要塞より大きいですね」

旗艦、戦滅艦 キルアーク の艦橋の床面には拡大宇宙図が表示され、隕石の予想進路を示す破線と、各艦隊の現在位置が黄色い輝点で現されている

さらにその上には、第五艦隊からの情報を基にした隕石の立体映像が出ている

「提督、作戦案が出来ました」

「良いのが出来ましたか？」

エルフェスは椅子を回転させてセルスカの方を向いた

「良いか悪いかは提督が決めることです。で、案は二つ。破砕か分断か」

「破砕の方が派手で良いと思いませんか？」

エルフェスは即答したが、予想していたセルスカは難色を示す

「破砕だと高い費用がかかります」

と、一応言ってみる

「今まで貯め込んだのがあるでしょう。貯めるだけじゃなくて使わないと」

「わかりました」

これも予想通り無駄だったセルスカは諦めて折れた

「ではそのように全艦隊に連絡艇で通達します」

「よろしく」

セルスカが立ち去ると、椅子を正面に戻し再び拡大宇宙図を眺めた

「さて、忙しくなりそうですね」

05 合流

現在、接近中の隕石に対して先行調査を行なっている第五艦隊は、隕石の構成物質や内部の様子などの調査を終えていた

隕石にはいくつかの鉱物資源が確認されたが、それらは全て現在の星系連合には必要とされないものだった

「これなら心置きなくやれますね」

エルフェスの顔には笑みが浮かんでいる。この状況を楽しんでいるかのように

よく笑っていられるものだ

横に立っているセルスカは、不思議そうに見ている。一応国の存亡がかかっているのだが

「セルスカさん、準備はどうですか？」

「あ、はい」

突然話し掛けられ一瞬反応が遅れた。だがエルフェスは気にする素振りは見せない

「現在全艦隊の四割が作戦位置につき、待機しています」

艦橋の床面に表示されている拡大宇宙図の中央、隕石の予想進路を示す二本の破線を挟むようにいくつかの黄色い輝点が光っている

「核融合弾は機動爆雷へ積み込み、高速輸送艦で輸送中です」

「数はどのくらいですか？」

「一個艦隊を殲滅させても余るくらいです」

「よろしい」

エルフェスはうなずいた

それから二人ともしばらく黙っていたがエルフェスが口を開いた

「セルスカさん」

「はい」

「私は、二 年ぶりの実弾が隕石相手とは思いませんでしたよ」

セルスカはぎょっとした

「提督、まさか……」

「もちろん戦争がしたいわけじゃありませんよ」

エルフェスはうつすら笑みを浮かばせながら宇宙図を見ている

「まあ、私が生きている間に撃つことになるとも思ってませんでしたし
ただ」

「私もですよ。この国は国対国の戦争なんて数百年経験していないんですから」

「運が良いってことですか？」

「わかりません」

艦橋に通信音が響いた

「提督、第五艦隊からです。予定通り反陽子砲と機動爆雷による攻撃を試すとのことです」

エルフェスはうなずいて答えた

時差を考えればもう攻撃は終わっているだろう

私たちの出番はありますか

第五艦隊の攻撃に有効性が認められれば第一艦隊まで回ってこない

派手にやりたいエルフェスとしては少し心配だった

第一 六二戦隊は第一艦隊と合流する為、コンラッド星系門に向けて超空間航路を航行中である

いつもなら瞬く星たちの輝きを映し出す艦橋の壁面も、今は無機質な機械の壁が剥き出しになっている

今艦橋にいるのはララ、イリアム、アトリアスの三人

「第五艦隊が攻撃を開始したそうです」

アトリアスが報告する
「始まったか」

「イリアム、恐いの？」

「恐いというか緊張ですよ。配属と同時にこんな大規模作戦に参加するなんて」

それを聞いたララはアトリアスを見た

彼女は緊張したりするんだろうか

たとえ緊張や恐怖を感じているとしても、彼女の表情からは読み取ることはいできない

「コンラッド星系門まで一二分。門管理局から許可ありました」

「うん。わかった」

コンラッド星系門はもう目前まで迫っていた

艦橋の壁面は相変わらず機械の壁だが、艦の自動航行によって隊列は崩れることなく、まっすぐ門に向かっていている

床面には超空間航路図とコンラッド星系門周辺の宇宙図が広がり、宇宙図には第一艦隊と思われる黄色い輝点の集団がある

「隕石はどの辺まで来てるんですかね？」

カイルが尋ねた

「もう第五艦隊は抜けてるだろうね。今頃第三、第四艦隊が準備に入ってるんじゃない？」

星系連合軍にはもつとも規模の大きい第一艦隊から第八艦隊まであり、それぞれが現在八　　―　　隻の戦艦で構成されている

完成間近や練習航行中のものを含めると、その数は倍近くになる

「第三、第四艦隊を抜けたらいよいよ僕たちの番ですね」

「ここまで来ないかもしれないだろ」

クロムが言った。それにこしたことはないな、とララは思った

「間もなく超空間航路を出ます」

外部カメラの映像をだす。気付けば門は目と鼻の先だった

「門通過します」

外の景色があつという間に宇宙の黒に変わった

第一　六二戦隊はコンラッド星系に入った

同時に第一艦隊から通信が入る

「門の通過を確認。直ちに合流せよ、です」

「了解、と返信を」

第一艦隊旗艦、キルアーク戦滅艦でも門から現われたー 六二戦隊の姿を捉えていた

「提督、新編入戦隊が到着しました」

「来ましたか。映像通信を」

頬杖をついていたエルフェスは通信が繋がるまでに姿勢を正す

ほどなくして艦橋前面に通信窓が現われソリスが敬礼をしている

「提督初めまして。第一 六二戦隊長ソリス百揮長です」

「こちらこそ初めまして。ソリス百揮長」

連合国皇太子であるエルフェスは広く顔を知られているが、同じ軍にいるからといって簡単に話ができない

ソリスは少々緊張気味だ

その通信窓の下ではエルフェスの部下たちがせわしなく動いている

もうすぐ機動爆雷を積んだ輸送艦が到着するのだ

「バタバタしてすみませんね」

「いえ。作戦中ですから」

「そう、作戦中なので手短かに伝えます。あなたの隊も作戦位置で待機、命令は後ほど」

「わかりました」

「隕石飛来は三日後の予定ですからそのつもりで」

敬礼してソリスの通信窓は消えた

06 一年ぶりの作戦開始

「みんな聞いてたわね」

ララ達もエルフェスとソリスの映像通信を見ていた

二人の通信が終わるとエルフェスの通信窓が消え、ソリスが今度は戦隊全艦に向けて話す

「招かれざるお客さんは三日後の予定。各艦、準備と休息は怠りなく。以上」

「さあて忙しくなるな」

通信窓が消えるとクロムが立ち上がった

作戦準備でもっとも忙しいのは彼ら兵匠科だろう

艦の整備点検で目の回りそうな三日間になる

「僕も行つてきます」

続いてカイルも席を立つ。第一艦隊の補給艦からの物資のチェックなどやることは多い

ララはつなずいて見送ると操縦桿を握った

「作戦位置まで移動する」

一 六二戦隊に割り当てられたのは、隕石の予想進路の左側、攻撃の際は主力として参加する

床面の宇宙図に目をやると第三、第四艦隊の輝点を隕石は通過していた

三つの艦隊を通過した隕石は元の体積の三分の一にまで小さくなっている

「作戦位置に到着」

「命令あるまで待機」

待機といってもあまりすることはない

アトリアスは第一艦隊の巡視艦から情報を得るため、情報連結作業をしているがその作業はすぐに終わる

砲術士のイリアムは正直やることはなかった

だがみんなが忙しいときに自分だけ何もしないのが嫌だったのか、忙しくて手の回らないところをやりだした

ララも作戦書を何度も読み返し頭に叩き込むことに没頭した

そして三日後、招かれざる客は予定通りにやってきた

「レーダーに目標補足」

「来ましたか」

エルフェスの視線の先には床面の宇宙図、そして第一艦隊に近づく赤い輝点

「提督。前の二艦隊、残しておいてくれたみたいですよ」

「そうみたいですな」

エルフェスの指先がリズムカルに肘掛を叩く

これを見るとセルスカは安堵する

機嫌はいいみたいだな

「提督、まもなく目標を射程距離に捉えます」

正面には外部カメラの望遠映像。ある範囲にだけ星が見えない。隕石の影が徐々に大きくなり第一、第二艦隊に迫ってくる

「全艦に通達。機動爆雷射出、射程距離まで待機」

第一艦隊全艦が射出口から機動爆雷を放った

放たれた機動爆雷は一定距離前進したところで停止し、攻撃命令を待つ

宇宙図の上には無数の輝点が群れを成している

命令が下れば群れは一斉に獲物に襲いかかることになる

「目標、射程距離」

「機動爆雷、攻撃開始！」

エルフェスが声高に命令を下す。待つてましたとばかりに推進剤を噴かし機動爆雷の群れが突撃を開始した。邪魔者はいない

宇宙図の輝点が一斉に動きだす。エルフェスは自分の命令でこれだけの数が動くことに興奮を憶えていた

「着弾まで十秒」

セルスカが秒読みを始めた

「五……四……三……二……一……着弾」

その瞬間、映像に映る巨大な影が無数の閃光に包まれた

「美しい……」

エルフェスは昔見た記録映像を思いだした

連合に所属するある有人惑星の小さな国で、夏の風物詩として空を鮮やかに彩る光の輪

「機動爆雷第一波、全弾命中」

「高戦艦は遊撃戦開始」

「遊撃戦命令が出たわ。相手は石ころなんだから気軽にやってらっしゃい」

ソリスが戦隊全艦に命令を伝えた

「よし、遊撃戦用意。機関始動」

「了解、機関始動」

「隕石破片群、高速で接近中」

「可動砲、反陽子砲ともに動作正常」

命令から一分以内に《レイフローズ》は戦闘態勢に入った

周りでは他の高戦艦が次々と動きだしている

この作戦での高戦艦の仕事は、機動爆雷によって砕かれた隕石の破片をさらに小さく砕く

「来ました」

アトリアスが淡々と告げると、ララは操縦桿を握り直す

迫ってくる複数の破片の中には高戦艦に直撃した場合、重大な被

害になるような大きさのものもあった

「迎撃開始！」

ララの掛け声で《レイフロース》の戦闘が始まった

開始と同時に放った反陽子砲の奔流がいくつもの破片を砕きながら伸びていく

イリアムも可動砲で懸命に破片を迎撃している

「右舷より大型片接近」

ララはとっさに姿勢制御機関を噴かし船体を上方向へ回避させた

「今のは危なかったですね」

カイルが深く息を吐きながら言った

もし直撃していれば爆散していたかもしれない
ララは頬を汗が流れていくのを感じた

巨大な破片は《レイフロース》の腹をかすめて飛び抜けていき、
待ち構えていた戦滅艦の一撃で砕け散った

「上角三、数四。右角四、数五」

アトリアスが次々に接近する隕石片を読み上げる

《レイフロース》はそれらを確実に撃っていく
「機動爆雷群第二波命中」

「これは予想以上に大変だ」

カイルが溜め息混じりに言った。休む間もなく破片群の第二波が飛んできている

高戦艦部隊は無数の破片の中から、地表に被害を与えそうなものを選んで破壊していく

「順調ですね」

エルフェスは余裕の表情で宇宙図を眺めている
第一艦隊旗艦、戦滅艦^{キルアック}は艦隊の一番奥にあり、強力な電磁防御壁をもつ護衛艦部隊に護られている

「提督！巡視艦部隊より緊急通信です！」

偵察士が声を荒げている。何やらただ事ではない雰囲気だ

「隕石中心部に反物質反応多数！これ以上刺激を与えると一斉に爆発します！」

エルフェスは余裕の表情を一変させ険しい表情で立ち上がった

「最優先緊急通信です！全艦攻撃中止！緊急退避！護衛艦は完全防御態勢で前へ！」

《キルアーク》から最優先緊急通信が艦隊全艦に飛んだ。あらゆる通信を遮ってこの緊急事態を知らせる

もちろん《レイフロース》にもこの通信は届いていた

07 レイフローズ、爆散

膨大なエネルギーを生み出す反物質は、戦艦の燃料にも使われているもので、主要な星系には反物質燃料精製工場もある

生み出されるエネルギーは核融合弾を遙かに上回り、艦の燃料槽に引火すると巨大な戦滅艦ですら跡形もなく消滅するだろう

「クロム技術士！機関最大！」

「了解！」

《レイフローズ》は重力制御がなければ座席から吹き飛ばされていそうな程の急旋回、艦尾から盛大な白炎を噴き出して離脱を試みる
周りの艦も同じような白い炎をあげている

艦橋は緊迫し、重力制御で加速圧を感じない中、誰も口を開くものはない

「反物質反応臨界点、爆発します」

アトリアスは相変わらず気持ちが悪くない

「電磁防御壁、艦後部に集中！」

隕石を映した外部カメラの映像の中心から光が広がり、画面は閃光に包まれた

「衝撃波来ます」

隕石の破片を含んだ爆発の衝撃波はあっという間に《レイフロース》を追い抜いて行った

「第五から第九区画に破孔、気密破られました」

アトリアスが報告した

「可動砲二門沈黙！外部カメラ、センサーも全部！」

続いてクロムが報告

「《レイフロース》大丈夫？」

その時ソリスから通信が入った

「破孔多数、センサー全滅、可動砲破壊……。退艦許可を願います」

ララはつつむき加減で言った

退艦許可 すなわち生き残るために、爆散へ向かう《レイフロース》を捨てるしかなかった

「《レイフロース》からの退艦を許可します。残念だけど」

「ありがとうございます」

ララは敬礼して通信を切った

外部カメラやセンサーが使えないため外の様子はわからない

衝撃波は通過したようだが

「クロム技術士、艦を救えそう？」

ララは尋ねた

「やはり無理です。なんとか爆散まで時間を稼ぐので手一杯です。燃料槽を切り離せば船体は救えますが……うちの班の半数が死傷、人手が足りません」

クロムは首を横に振った

「そう、しかたないわね。アトリアス偵察士、退艦警報を」

艦内に不吉な音が響いた。一生聞きたくなかった音だ

「全乗員に告げる。すべての任務を解除、担当部署を放棄し脱出艇で脱出せよ」

ララは放送を終えると主任達に指示をだす

「計務班は負傷者の救護、技術班は脱出艇の準備を。アトリアス偵察士とイリアム砲術士は移乗の指揮をとって」

指示を聞いた者から順に艦橋を出ていき、最後にララが残った

艦長席の横に立ち艦橋を見渡す

「《レイフロース》、上手くやれなくてごめんね」

そう言って出口に向かい、再び艦橋の方を向き敬礼をして出ていった

「艦隊の被害は!？」

第一艦隊旗艦、キルアーク戦滅艦の艦橋に副長セルスカの声が響く

提督エルフェスはその横で険しい表情のままだ

「大破と爆散合わせて五隻、死者三以上、負傷者は相当数です」

偵察士が報告した

「まさか反物質とは」

セルスカは肩を落とした

「そうですね。たかが隕石でこれほど被害が出るなんて」

衝撃波が《キルアーク》を襲ったとき、三隻の護衛艦が《キルアーク》の前方に付いていた

戦滅艦が火力重視なのに対して、護衛艦は防御に特化した艦種で高出力の電磁防御壁発生機関を搭載している

その護衛艦も巨大な塊の直撃を受け、一隻が宇宙に散った

「とにかく無事な艦は脱出艇を回収して、艦隊を編成し直してください」

「わかりました」

セルスカは指示を受けて部下のところへ降りていった

「ふう」

エルフェスは深く息を吐いて背もたれに体を預けた

短い生涯を終えようとしている《レイフロース》から、小さな脱出艇が次々と飛び出してくる

小爆発を繰り返す《レイフロース》の艦内で、ララは脱出艇甲板に向かっていた

「カイル！」

その途中でカイルと合流した

「ララ！後は君だけだよ、急いで！」

「わかった！」

すでに重力制御は失われ、無重力の中を壁を蹴って進む

カイルが前を進み隔壁扉を開けて、通ったらすぐ閉める

だが次の扉を開けた時事件は起きた

大気が残っていた先の区画から真空状態のこの区画に空気が一気に流れ込んできたのだ

「ララ！危ない！」

その勢いで破片がララめがけて一直線に飛んできた

ララはとっさには動けず目をつぶって固まってしまった

だが鈍い音はララの少し前でした

「うう……」

カイルの低く唸る声が聞こえ、恐る恐る目を開けると

「カイル！」

カイルは力なく真空空間に浮いていた。与圧ヘルメットは前面部分で砕け、出血もしている

「大丈夫！？」

ララはカイルのヘルメットを外した。赤く染まり出血の多さを物語る

「ララ……大丈夫かい？」

「私は大丈夫だから早く手当てを」

だが近くに医療用具はない。手当てをするには脱出艇まで行かなくてはならない

ララはカイルを担ぎ上げ、通路を埋め尽くす荷物を掻き分けながら進んでいく

「僕のことはいいから、先に脱出艇に……」

カイルは弱々しい声で言った

「そんなの嫌よ。一緒に脱出するの」

「でも……」

「怪我人は黙ってて」

カイルは言われた通り黙っていたが、一言

「ありがとう」

「……バカ」

その後二人はなんとか脱出艇に辿り着き、カイルは応急の手当てを受けた

レイフローズ
高戦艦は衝撃波に襲われてから四分後、燃料槽に引火し乗員が

見守る中爆散した

08 夢の実現へ

隕石破壊から一カ月後、皇星ファムリオールにある軍病院の個室でカイルは熱心に端末に表示されている写真や文章に見入っていた

端末上には 星系間貿易に関する資料 として様々な条文や注意事項が画面いっぱいになんかと表れる

カイルは時折その難解さに唸り声を上げながらも、ゆっくりと一つ一つ読み進めていく

「カイル、そんなに近づいたら目が悪くなるよ」

個室に入ってきたララが言った。カイルは端末をベッドに出来る限り寄せて、まさに目の前で読んでいた

「でも片目じゃよく見えないんだよ」

カイルは右目に眼帯をしている。一ヶ月前のレイフロースが爆散したときの事故で、右目を負傷したのだ

「もう痛くはないの?」

「ちょっと痛いけど大丈夫だよ」

「もう眼帯は取ってもいいって言われたでしょ?」

カイルは眼帯にそっと触れて

「これからは死ぬまでこうなんだ。軍には戻れないし早く慣れないとね」

右目の傷は予想以上に深く、視神経を損傷し右目は完全に光を失っていた

カイルはそれが理由で軍を退役したのだ

「それにしても君まで辞めることなかったのに」

カイルは読む手を止めララに言った

「その怪我は私を庇ったからよ。もしあのまま軍に残っても後味悪いし、なにより私が嫌だったのよ」

「……そっか」

カイルは一言笑顔で言うと、再び端末に向かった

「で、まだまだ長い残りの人生はそれでやってこうってわけね」

「うん。父さんが星系間貿易船の船長でさ、子供の頃に何度か付いて行ったことがあるんだ」

貿易者になりたいというのは、軍に入りたての時から考えていたことだ

軍に入ったのも他にやりたいことがなかったからで、宇宙に行きたいという友人と一緒に入った

その後友人は早々に辞めていき、計務科に入ったカイルも軍と取

引のあった貿易船に出入りしている内に興味を持ち始めていた

「でも肝心の船がないじゃない」

「今まで貯めてきたお金があるから、それで小さい船から始めるよ」

「それに私たち二人じゃ貿易なんか出来ないわよ？」

「それは……」

カイルは危うく聞き流しそうになり、ララの方を見た

「私たち？」

「何よ、私じゃ迷惑なの？」

「いえ、滅相もない。よろしく願います」

「そうそう、船のことなら良い話があるのよ」

その時ララの通信機が鳴った

「よおカイル」

「クロムさん？」

通信機から聞こえた意外な声に、カイルは驚いた

「どうしたんですか？」

「お前が船探してるって聞いたから良いのを見つけてきてやったん

だ

「本当ですか!?!」

「これだ」

ララの携帯端末から貿易船の立体映像が映し出された

「型は一つ前だが最新型とたいして変わらない。かなりお買い得だぞ」

「いいんですか?」

「おれも軍辞めてから仕事ないんだよなあ」

クロムは遠回しに仕事を要求している。もちろんカイルはわかっているが

「もちろん喜んで!」

カイルは二つ返事で了承した

「詳しいことは近いうちにそっちに行くからその時に」

「わかりました」

カイルは通信を切った

「ありがと、ララ」

「んー?」

「ララは窓から外を眺めていた」

「クロムさんに言ってくれたんでしょ？」

「なんのことかしら」

「ララは笑顔でとぼけた」

「それより責任者なんだからちゃんと勉強しなさいよ」

「はいはい」

カイルは言われた通り端末を埋め尽くす文列に向かい始めた

二日後、クロムがカイルの病室を訪れた

カイルは翌日の退院に備えて身の回りを整理していた

「以外に元気そうだな」

「まあ目だけですから」

よく見ると眼帯から傷がはみ出している。この傷はカイルの印象を大きくかえるだろう

「これが船の詳細だ」

クロムの端末から自分の端末に情報が送られてきた

すぐに呼び出してみる

画面には船の積載能力や航続距離、居住区の見取り図などが表示された

「これはすごいですね」

クロムが見つつけてきた貿易船は有名貿易船団が使っているものと遜色なく、初めて持つ船にはかなり立派な船だった

「他のメンバーもおれの部下を中心に集めといたんだが、まずかったか？」

「いえ、ありがとうございます」

ちょうど他のメンバーのことを考えていたところだった

カイルはその手際の良さに改めて感心した

「で、これだ」

最後に出したのは《貿易活動申請書》

すべてを記入して星系間貿易協会に提出すれば正式に貿易者として登録される

当然主な記入はクロムが済ませていた

「あとは責任者の署名と団体名だ」

「団体名か……」

カイルは記入欄を見つめながらしばらく考えた
「よし」

カイルは決心して署名と団体名を記入した

「じゃあこれで」

カイルから申請書を受け取ったクロムは

「なるほどねえ」

と笑って言った

そして端末から申請書を協会に送信した。不備がなければ今日のうちに返信がくるだろう

「返信はお前の端末に来るからな。じゃあおれはやることあるから」

「色々ありがとうございます」

「なんたって就職先だからな」

クロムが出ていった後一人残った病室で、カイルは外を眺めながらこれから始まるであろう貿易人生に思いを巡らせた

その日の夕方、正式に登録が完了したと協会から返信があった

終章 新たなる旅

星系連合は皇星ファムリオールを中心として多くの星系で構成される

各星系の文化はしっかり守られ、政府も星系ごとに存在する

もちろん言語も星系ごとに違う。故に連合に所属する全ての星系の言語が収められた翻訳機が広く流通している

星系間を飛び回る貿易者には仕事上欠かせない物だ

「まいったな」

貿易船サレルの船長室でカイルは困っていた

服の上から自分の体を探るが出てこない

その時室外通信機が鳴った。ララだ

「*****?」

翻訳機を無くしたカイルには何を言っているかわからない

カイルとララは違う星の出身で、話している言語は違うのだ

無くしたことをララに伝えると呆れたような雰囲気では何か言い入ってきた

「*****」

わからないが表情を見るかぎり多分非難されているのだろう

「じゅめんよ」

するとララはポケットからスペアの翻訳機を取り出して差し出した

カイルは受け取り、耳に付けた

「気を付けてよね」

「うん、じゅめん」

カイルはこの時初めて翻訳機の重要性を再認識した

「もうすぐ積み荷の搬入が終わるわ。そしたらすぐ出航でいい？」

「そうだね」

「じゃあ早めに来てね」

ララはそう言つと通信機でメンバー達に指示をだしながら出ていった

カイルも船長用の長衣を着込み、少し遅れて船長室を出た

「物資搬入作業、あと五分で終了します」

通信担当が報告する

「作業が終わり次第出航する」

「了解」

ララは慣れたように受け答え、出航の時を待っている

部下達は出航準備の作業に追われている

そこへカイルがやってきた

「遅いわよ、船長」

「これ、初めて着たんだよ」

「もうすぐ作業は終わるわ。出航準備もね」

「さすがだねララ、手際がいい。船長は君の方がいいんじゃないか？」

「私は補佐、船長はカイル」

ララは反論はさせないとばかりに言い切った

カイルは苦笑いをする

「船長、搬入作業が終了しました」

「出航準備は？」

「出来てます」

カイルは船長席から立ち上がり見回した

皆がカイルの言葉を待ち視線を送っている

「……主機関、始動」

「主機関、始動」

《レイフロース》と同様に船の機関を管理するクロムが《サレール》に火を入れた

残るはカイルの一言のみ

ふとララと目が合うとララは笑ってうなずいた

カイルは正面を見据えて胸を張る

「^{サレール}貿易船、出航！」

姿勢制御機関が一瞬弱く息を吐き、《サレール》は宇宙港の連結から離れた

約二カ月ぶりの宇宙はいつもと変わらず静かにカイル達を迎える

「進路はミロキア星系へ」

最近のニュースでは星系連合の領域境界付近で、連合への所属を拒み続けているバスカー星系との間で数百年ぶりの人対人の戦闘があったと言っ

カイルは高らかに故郷の名前を告げた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2947a/>

星屑の戦艦

2010年10月11日15時38分発行